

茗溪学園中学校高等学校

茗溪学園と学寮（2）

教務部長 田代 淳一

茗溪学園は開校以来寮を備え、中学1年生から高校3年生までの全国・世界中の生徒に門戸を開き続けています。今回は、「寮生としての適性」と、私がハウスマスターをしていたときの体験を中心にお話します。

寮生としての適性

寮生になるためには面接試験の関門をくぐり抜けなければなりません。入学試験の際に、寮希望者は受験生本人面接の他に保護者同伴面接を受検しますが、その両方で「寮生としての適性を有しているか」を判定されます。

寮のある学校でも、「高校生のみ入寮可」という学校が少なくありません。これは、自我が確立し始め、思春期真っ只中の「中学生」を寮生として預かることがどんな意味を持つか、どれだけの覚悟が必要かを物語っています。中学生と言っても、中学1年生の前半は精神的にも内面的にもほとんど小学生です。中学2・3年生は、社会の仕組みや自分の所属している環境を少しずつ客観的に見るができるようになり、同時に批判的精神や不満も抱き始める時期です。この双方の子どもたちを、いかに、一緒に育てていくか、が課題です。

茗溪学園では、創立以来「集団生活としての自覚」を核にしてきました。中学フロアは1部屋3人、理想的には1・2・3年生が各1名ずつ。3年生が室長となり、室長会がフロアの日々の運営を担当します。中学フロアには男女とも、高校2年生のアドバイザーが2～3名、一緒に生活し、中学生の様々な相談役になったり、問題が起きそうときのさりげない調整役を務めてくれたりします。このアドバイザーは名誉な役であり、学年の寮生の中から校長先生が任命します。

さて、このような中学フロア。入学試験の際の可否の判定材料である「寮生としての適性」は男子と女子では若干異なります。

以前の中学男子フロアでは、5月頃になると1年生が泣きながらハウスマスター室に駆け込んで来るがありました。わけを聞くと上級生に殴られたとのこと。「すは暴力事件」とばかりに関係する上級生やその周辺の寮生、アドバイザーを個別に呼んで事情聴取。その結果わかるのは、その1年生が入寮以来、片付けができない。お菓子を食ったらゴミを散らかす。脱いだ服は片付けられない。自分の荷物を整理できず部屋に広げたまま。最初はやさしく注意していた上級生も、度重なるにつれだんだんきつくなり、1ヶ月めあたりに我慢でき

なくなり「いい加減にしろ!!」。暴力を振るうのはどんな場合でもいけないと注意しながらも、上級生の気持ちもよくわかる。

そこで、現在では中学1年生の男子だけ、特別に1ヶ月間校長先生のフロアに預かってもらい、校長先生と奥様に徹底的に基本的しつづけをトレーニングしてもらっています。学校から戻ったらカバンの中をどう整理し明日の用意をするのか。洗濯はどのようにし、どう干し、どう取り込み、たたみ仕舞うのか。掃除はどう行い、ゴミの処理はどうするのか……。トレーニング終了後、上級生に混ざって本格的な寮生活を始めさせています。このようにしてからトラブルがグッと減少しました。つまり、男子の場合の「寮生としての適性」の最も重要な点は「自分のことが自分でできるかどうか」なのです。

女子の場合はまったく異なります。散らかしたり整理のできない女子はまれにしかいません。女子で問題なのは「友人関係」です。特に、不安感のあまり、異様な独占欲を発揮してしまう生徒がいるとフロアが大変やりにくくなります。相手が同じクラスだったりすると、本当に1日中一緒にいることになり、学校でもべったり、寮でもべったりという関係になりかねません。トイレに行くにも一緒、お風呂に行くにも一緒、食事買い物も……。本当に気の合う場合はまだ少しは救いがありますが、それでもいつかは破綻しますし、片方が体調不良で帰省したりすると完全に孤立します。そこで、中学女子フロアで最初に生徒に指導する大切なことは「誰とでも等距離で仲良くする」ということを、全員の前で全員に指導することです。6年間一緒に生活する仲間。誰とでもお風呂に行き、誰とでも買い物に行ける、そういう関係になれることがとても大切だから、努力しなさい、と指導します。女子は全体の前でこのように話をすると受け入れて行動します。このような指導を受けられる受容性を持っているかどうか。つまり、女子の場合の「寮生としての適性」に関する面接の観点は「今まで友人関係に関するトラブルをどのように処理してきたか」なのです。

男女ともに共通な「寮生としての適性」の重要事項は、「自分で学習できるかどうか」です。「沈黙の時間」にハウスマスターが勉強しているかどうか巡回しますが、勉強しているフリは